日本医史学雑誌　第56巻第3号（2010）　427–436

新出の平沢屏山のアイヌ種痘図に関する一考察
――オムスク造形美術館所蔵の「種痘図」を巡って――

松木　明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学講座

受付：平成21年8月5日／受理：平成22年7月22日

要旨：1857年箱館奉行村垣範正は幕府に蝦夷地のアイヌへの強制種痘を建言した．この重要性を理解した幕府は桑田立斎ら数人の医師を蝦夷地に派遣し，彼らは1857～8年に苦労しながら廻郷種痘した．箱館の商人杉浦嘉七は村垣の英断を顕彰するため平沢屏山に桑田らのアイヌ種痘の光景を描かせて1857年にそれを村垣に献上した．富士川　遊の伝えた原図の住所は未だ不明である．

オムスク造形美術館所蔵の屏山の種痘図と富士川の伝えた図を比較すると，基本的構図は同じであるが，細部の点で異なった部分も見られ下絵の存在が示唆される．村垣の公務日記には図に見られるような桑田らの種痘実施の記事はないので，屏山はこのような光景を見ることなく描いたと推察される．

キーワード：村垣範正，桑田立斎，杉浦嘉七，平沢屏山，アイヌ種痘図

はじめに

箱館奉行村垣範正（淡路守，文化10，1813～明治13，1880）は安政3年（1856）12月17日から翌安政4年（1857）3月24日まで長万部，須津（寿都），岩内，島小牧（島牧），沙流，白老，有珠，鷲の木を含む蝦夷地を巡回視察[1]したが，そこで見聞したのは痘瘡の猖獗に怯えるアイヌたちの姿であった．この惨状を改善するためには牛痘種痘の実施普及以外に方法はないと考えた村垣は幕府に対してアイヌへの強制的種痘を建言した．建言の書状は巡回視察中の村垣が安政4年1月19日に須津（寿都）で認めたものであった[2]．事態を重く受け止めた幕府は早速種痘医を雇って蝦夷地に派遣することに決定し，この旨は3月3日箱館に伝えられ，巡回視察を終えて箱館に帰ったばかりの村垣は3月26日にこのことを知った[3]．幕府は江戸から桑田立斎と弟子3人そして箱館出身の深瀬洋春などを派遣した．これが安政4，5年の蝦夷地種痘として知られ，箱館の豪商杉浦嘉七はアイヌ絵師平沢屏山（ひらさわ びょうざん，文政5，1822～明治9，1876）[4)–7)]にその様子を描かせた．その絵はアイヌ種痘図として知られ，後に錦絵にもなった[8]．なおアイヌ種痘図は様々な名称で呼ばれているが，本稿では一般的名称として「アイヌ種痘図」としておく．

一方，安政5年（1858）に幕府は欧米各国と修好通商条約を締結したが，これを承けて翌安政6年（1859）6月に神奈川（横浜），長崎と共に開港した箱館（函館）は平成21年（2009）に開港150周年を迎えている．これを記念する各種の行事が行われているが，その一つとして市立函館博物館では「アイヌの美――カムイと創造する世界――」と題する特別企画展が7月18日から9月6日まで開催されている．アイヌの生活用具，衣服，装飾品，祭祀・呪術用具などサンクトペテルブルグのロシア民族学博物館，オムスク造形美術館所蔵の資料227点に市立函館博物館および北海道開拓記念館所蔵の関連する資料を加えた展覧会である．

この中でオムスク造形美術館から出展された平沢屏山による12枚のアイヌ絵は本邦初公開であり，その中の1枚はアイヌに対する種痘図である．この図を仔細に観察すると，従来われわれに知られていたアイヌ種痘図と些か異なることが分かった．そしてこのことはアイヌ種痘図の成立に関して新しい見解を提供すると思われるので，新出の「種痘図」を紹介し，併せてアイヌ種痘図の成立に関して私見を述べてみたい．

1　オムスク造形美術館所蔵の「種痘図」について

オムスクはロシア連邦中南部，ウラル山脈の東の都市（人口113万人）で，シベリア鉄道が通っておりチェリャビンスクとノボシビルスクの中間に位置する．オムスク造形美術館には平沢屏山のアイヌ絵12枚が所蔵されている．これが今回出展されているアイヌ絵である．市立函館博物館の霜村の解説[9]によれば，ロシア科学アカデミー会員で植物地理学者のエヴゲニイ・ミハイロヴィッチ・ラヴレンコは1984年に3500点に及ぶコレクションの寄贈を申し出て，ロシア美術館の仲介によって翌1985年にオムスク造形美術館に正式に寄贈された．1990年初頭にコレクションの整理が終了し，多くのロシア絵画以外にヨーロッパの版画，中国や日本の絵画，仏像などがコレクションに含まれていることに注目が集ったという．日本の絵画の中に平沢屏山のアイヌ絵が12枚含まれていた．ラヴレンコが1949年にレニングラードの古書店から購入したものだという．12枚の絵の画題を図録によって列記すると，ウイマム図（ウイマムとはアイヌの首長が隣邦の首長と交易を行う際の儀礼であったが，後には松前藩主へのお目見え行事になった），オムシャ図（挨拶儀礼であったが，後に蝦夷地での交易や漁労終了時の慰労行事となった），種痘図，穴熊引き出し図，熊送り図，踏舞図，夜間サケ漁図，鹿猟図，熊猟図，眺望図，貝突き図，斬首図で，いずれも彩色である．

「種痘図」[10]を図1に示す．図の大きさは縦20.4，横32.7センチメートルで，洋紙に描かれている．この洋紙に「J&JH 1862」という透かしが入っており，さらに図右下に「辰冬初日　屏山写」とあることから1868年（明治元）10月1日に制作さ

図1　「種痘図」（オムスク造形美術館所蔵）
財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編『アイヌの美――カムイと創造する世界――』2009．p.140

れたことが判明した．

「種痘図」では大きな建物の中で2人の種痘医による接種が行われており，図右上の一段高い部屋には役人と思しき3人が坐っている．真ん中が村垣淡路守であろう．その後は六曲半双の屏風で，描かれているのは市立函館博物館の霜村[11]によれば安政3年（1856）に着工され元治元年（1864）に完成した箱館の弁天岬台場であるという．

種痘医は2人で，向ってその左側には書記の役人が1人坐っている．種痘医の右側には助手役の男2人がおり，その右側に4人の役人が坐っている．種痘を受けている2人のアイヌの後には順番を待つアイヌたちが坐っており，さらにその後のいろりの廻りには接種を終えたらしいアイヌたちが暖を取っている．いろりには自在鉤が吊るされており，大きな薬缶が懸けられている．書記の役人の左側にも順番を待つ大勢のアイヌたちの姿が見える．描かれているアイヌは，とくに子供の数は判然としないが，総計約70数人である．

2　アイヌ種痘図の系譜

これまでの研究[12)–16)]によれば，アイヌ種痘図の原図は安政4年（1857）に箱館の豪商福島屋第二代の杉浦嘉七（文化8，1811～明治6，1873）[17]が，アイヌへ種痘を行ってその窮状を救った奉行村垣淡路守の徳を称え，業を顕彰するために絵師平沢屏山に描かせて献上したものであった．安政4年（1857）10月21日のことであった[18]．村垣は学問所頭取で知人でもあった塩田順庵（文化2，1805～明治4，1871）に依頼して杉浦から贈られたアイヌ種痘図に讃を書いて貰った[18),19)]．そして村垣は箱館での勤務を終え，安政5年（1858）9月10日箱館丸に乗船して，同月21日に帰府した[20]．

前年の安政4年（1857）11月に江戸に帰っていた桑田立斎は村垣の許しを得てアイヌ種痘図の模写を1枚作り，これに西島秋航の讃を付け加えた．秋航の讃の末尾に「安政己未陽月」とあることから，この模写が安政6年（1859）10月に作られたことが知られる．つまり桑田立斎が作らせたアイヌ種痘図には塩田順庵と西島秋航の2人の讃が書き込まれている．明治29年（1896）5月の善那氏種痘発明百年紀念会で陳列された資料の中に，東京の桑田巳一郎が出品した「蝦夷人種痘の図」[21]はこれであろう．これが現在新潟市の森田宏氏所蔵の「蝦夷種痘図」[15]で，宗田の「図説日本医療文化」[22]にもカラー写真で紹介されている．立斎が村垣の許しを得て模写を作ったことは，この絵が桑田立斎の種痘光景を描写したもので，深瀬洋春の種痘実施を描いたものではないことを強く示唆すると思う．中野　操[23]は桑田家に伝えられた絵を杉浦嘉七が村垣に贈った絵と誤解しており，阿部龍夫[24]は中野の誤りを指摘している．

桑田家分家の権平氏は昭和15年（1940）に京都美術学校の林　司馬画伯に頼んで桑田家に伝えられた模写からさらに2枚の模写を作成した．1枚を大阪大学に，残りの1枚を北海道大学に寄贈した．北海道大学に寄贈された図は同大学図書館北方資料室に所蔵され，「蝦夷人種痘之図」として昭和45年（1970）に発行された「新北海道史」[25]の口絵カラー写真として紹介されている．またインターネット上でも公開されている．

一方，村垣に贈られた原図と思われる図を富士川　游が「風俗画報」[26]に掲載しているが，果たしてこれが本当に村垣家に伝えられた図であるか否かははっきりしない．この原図の所在は依然として不明であったが，その可能性のあると思われる絵が東北福祉大学の芹沢銈介美術工芸館に「種痘施行図」として所蔵されていることが分かった．その全体図と部分図はインターネット上で公開（今週の1点　No. 076，2008年5月7日）されており，それによると縦69.7，横91.5センチメートルである．上部ははっきりしないが塩田順庵の讃だけと思われる．しかし落款は見られない．新明英仁[27]はこの絵に屏山が後年に用いた関防印「背山臨水」があることから，後年の再制作である可能性を指摘しているが，そうすれば塩田の讃の問題をどのように解釈するかが大きな問題になる．平成20年（2008）の日本医史学会役員会の席上で大阪の加藤四郎氏からこの図の詳細について論考を執筆する予定との意向を直接お聞きしているので，この「種痘施行図」に関しては詳細な言及を避けたい[28]．

3　オムスク造形美術館所蔵の「種痘図」と森田宏氏所蔵の「蝦夷種痘図」との比較

ここでは新出のオムスク造形美術館の「種痘図」（図1）と立斎が模写させた森田宏氏所蔵の「蝦夷種痘図」（図2）とを比較する．なおオムスク造形美術館の「種痘図」をカラーで転載すべきであろうが，「アイヌの美――カムイと創造する世界――」特別企画展を企画した財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構の谷氏によれば，図録作成以外に図の転載を許可する権利を財団法人は取得していないとのことであった．したがって今回は出典を明記した上で，研究上必要な最低限の条件を満たす白黒写真を掲載することにした．

両図を比較すると，上座に上役と思しき3人の役人がいて，その手前で2人の種痘医が2人のアイヌに接種しており，向かってその左側には書記役の役人1人，右側には都合4人の役人が坐っているのは同じ構図である．接種を受けているアイヌの後ろには順番を待つアイヌたち，そしていろりの周りには種痘を終えたらしいアイヌたちがおり，書記役人の向う側にも大勢のアイヌたちが接種を待っているように描かれているのも両図に共通している．つまり全体の構図は同じであり，同じ光景を描いたものと理解される．

しかし異なっている点も見られる．全体的には

図2　「蝦夷種痘図」

宗田　一著『図説日本医療文化史』1989．p.189

「蝦夷種痘図」では大広間で種痘が行われているように描かれているが，「種痘図」では少なくとも2部屋で行われているように見える．アイヌの人数，位置も異なっている．上座の役人の後は「蝦夷種痘図」では近江八景を描いた衝立であるが，「種痘図」では前述したように六曲半双の屏風で，描かれているのは箱館の弁天岬台場である．「蝦夷種痘図」ではアイヌたちに与えられる数々の報奨品が見えるが，「種痘図」ではそれが見当らない．前者ではいろりに自在鉤がなく，薬缶2つはいろりの灰の上に置かれているが，後者では自在鉤が吊るされており，大きな薬缶が懸けられている．なお「蝦夷種痘図」に描かれたアイヌは子供の数は判然としないが，約90人と思われる．「種痘図」では前述のように約70数人である．

以上のことから，「種痘図」は「蝦夷種痘図」とは，種痘医2人，助手役の役人2人，種痘を受けているアイヌは2人，上座の役人3人，下座の役人3人，いろりを囲むアイヌたちという基本的構図は同じである．異なった場所，異なった時点での種痘施行の実際の光景を描いたのではないと考えられる．すなわち「蝦夷種痘図」よりも11年後に描かれた「種痘図」は「蝦夷種痘図」に用いた下絵を基に制作されたのであろう．そうでなければ全体の構図はもちろんのこと，種痘医や役人の人数，アイヌの姿態，例えばいろりの右側のアイヌがキセルで煙草を飲んでいる姿などを記憶だけで画くことは不可能であろう．複数の下絵が存在したであろうことは函館市立中央図書館所蔵の「ゑぞ人うゑほうそうの図」（図3）[29] によっても首肯されよう．

4　平沢屏山の図に見られるアイヌへの種痘がいつ箱館で行われたのか

ここでいう図とは奉行の村垣に献上されたアイヌ種痘図のことである．箱館の豪商，二代目の杉浦嘉七は村垣淡路守によるアイヌたちへの強制的種痘の英断を称えるため，アイヌ絵師平沢屏山にその様子を描かせて献上した．村垣の公務日記に

図3　「ゑぞ人うゑほうそうの図」
高倉新一郎編　アイヌ絵集成〈図録巻〉第148図

「（安政四年）十月二十一日　種痘之図嘉七出す．順庵江讃頼之」[30] とあるので，10月21日までに図が完成したことが知られる．その後村垣は塩田順庵に讃を依頼したが，讃の完成時期は村垣が江戸に向けて箱館を出立した翌安政5年（1858）9月10日までのことであろう．

深瀬洋春が箱館に到着したのは安政4年閏5月5日，桑田立斎が到着したのは閏5月29日であった．当初深瀬が東蝦夷地に，そして桑田が西蝦夷地に赴く予定であったが，桑田は義兄の関谷準之助がクナシリ島に調役並として赴任しており，種痘に反対する頑固なアイヌが多いとされる東蝦夷地に赴くことを願い出て許可された．こうして桑田が東蝦夷地，深瀬が西蝦夷地の種痘を担当することになった．両者が箱館を出立した正確な日は知られていないが，立斎は6月30日に室蘭を出発している．これからすると箱館を出発したのは6月20日頃ではないかと二宮は推定している[31]．箱館を出立した桑田らがアイヌ集落に到着しても，種痘に恐怖心を抱くアイヌたちは山の中に逃げ込んで集落にはアイヌたちがいなかった．このため彼らを説得して種痘を受けさせるまでに一集落で少なくとも数日を要したであろう．この間の事情は立斎の年表[32] によって理解される．

箱館より夷地へ出立前日，井上元長，庄右衛門付添山クシナイ（山越内）迄遣し置，夫より一日後れ苗児二人召連，鷲木迄罷越候処，井上元長立帰り，『種痘の風便承り夷人驚怖致し，尽く山中へ逃げ込，殊の外操（騒）動』にて，詰合吉岡新太郎早馬にて来り，『暫く夷地に入り候事見合（せ）呉候様』に付，無拠三日滞留．種々方便にて散財致，頻りに教解申聞（せ）候へ共，更に人心居（折）り合不申

以上のような状況であったので，立斎らの種痘行は当初決して円滑なものではなく，むしろ困難を極めた事態にあったことが了解されよう．このようなことから彼らが箱館を出発してから室蘭に到着するまでに10日は要したであろうから，これから逆算して箱館を出立したのは6月20日頃と考えられる．このように立斎の箱館出発の時期を詳しく述べたのは，立斎の箱館滞在の期間を推定するためである．というのは杉浦嘉七の依頼を請けて屏山が桑田立斎のアイヌへの種痘の様子を箱館で実見したとすれば，その時期は立斎が箱館に到着した閏5月29日から箱館を出発したと思われる6月20日頃までであろうと思われる．

箱館には立斎到着前にすでにビンに入った痘苗が江戸から届けられていた．村垣の公務日記に3月26日に7瓶[33]，4月12日に1瓶[34]，4月16日に1瓶[35] が到着したとある．これらは奉行所御雇医師の田澤春堂らへ渡された．そして田澤らは六ケ場所として知られる箱館近辺の子安，戸井，尻岸内，尾札部，茅部，野田追で改郷種痘を行った．村垣の公務日記に「閏五月二十五日　土井能登守家来中村岱佐は下役並，春堂季碩は同心並日当り御手当被下旨，是は先日六場所辺種痘として罷越候ニ付て也」[36] とあることによって証される．立斎が箱館に到着したのは前述したように閏5月29日であったから，遅くともその一週間ほど前には六ケ場所でのアイヌへの種痘は終了していたことが分かる．つまり立斎が箱館に到着する前に箱館近辺のアイヌたちへの種痘はすでに完了していたのであった．また立斎が六ケ場所で種痘を行ったという事実も知られていない．安政4年（1857）12月の時点で六ケ場所に居住するアイヌは合計336人であったという[37]．平均すれば一場所当りのアイヌの人数は66人になる．この人数は「蝦夷種痘図」に描かれたアイヌの人数約90人を下回る．

そうすれば六ケ場所から箱館にアイヌたちを集めて種痘したのではないことが理解され，屏山が描いたのは箱館におけるアイヌへの種痘ではなかったことが強く示唆される．事実，村垣の公務日記にも箱館において多人数のアイヌへの種痘が行われたという記事は披見されない．アイヌへの種痘は村垣が幕府に建言して実施された歴とした幕府の公務である．公務であるからにはこのことが「公務日記」に記されて当然であろう．村垣の公務日記の安政4年6月1日から30日[38] までを通覧しても，アメリカの貿易事務官ライスに関連

した公務や日常の公務以外に，乗馬の訓練（6月8日，18日，23日），鉄砲の練習（6月9日，11日，13日，15日，19日，20日，25日，26日，30日）などの個人的な記事が見られるものの，しかし公務であるはずのアイヌへの種痘に関連した記事は一件も披見されないのである．この間村垣はずっと箱館に在勤しており，近隣の村々への巡察などには出かけていない．このようにアイヌへの種痘関連記事が公務日記に記述されていないことから推察すれば，箱館においては屏山が絵にしたような大々的なアイヌ人たちへの種痘が行われなかったと見て差し支えないと思う．

安政4年閏5月から10月20日までの屏山の動静は全く知られるところがないが，立斎ら一行に同道して彼らの種痘実施の光景を描写した形跡は全くない．立斎側の記録に屏山の名前を全く見出すことが出来ないからである．種痘の実績を挙げるため立斎らは室蘭から各々別行動を取ることにした．これは箱館出発前に奉行の村垣から了解を得ていたことであった．立斎は従者1人を連れて幌泉場所（えりも町），十勝場所（広尾町）を経てクナシリに向かった．井上元長は勇払，沙流，新冠，静内，浦河を，秋山玄譚は振内，有珠近辺を，西村文石は石狩地方をそれぞれ苦労しながら巡回種痘した[39]．そうすると「蝦夷種痘図」に描かれたような「種痘医二人」によるアイヌへの接種は立斎たちが室蘭で別れた以降には行われなかったことになる．つまり屏山が実際に種痘の光景を見て図を描いたとすれば，その時期は立斎たちが箱館を出発したと思われる6月20日頃から室蘭を出発した6月30日までということになる．屏山が井上元長，西村文石，秋山玄譚ら立斎以外の種痘実施をその目で目撃した可能性は残されているが，それを実証する史料は遺されていない．目撃したとしても「蝦夷種痘図」に見られるような2人の種痘医ではなく，1人による接種であったことは間違いないし，もちろんその場所と時期の特定は不可能である．このように考えると，平沢屏山は立斎の箱館到着前に行われた六ケ場所でのアイヌ種痘を含めて，どこかで接種を実地に目撃したとしても，「蝦夷種痘図」に描かれたような村垣が臨席した種痘光景を実際に見ることなく図を描いたことになる．

果たしてそのようなことは可能であろうか．和人の役人とアイヌたちという構図はオムシャ図（図4）[40]にも見られる．これを考慮すれば，屏山にとって役人と大勢のアイヌ，それに2人の種痘医を配した絵を想像して描くことはそれほど困難

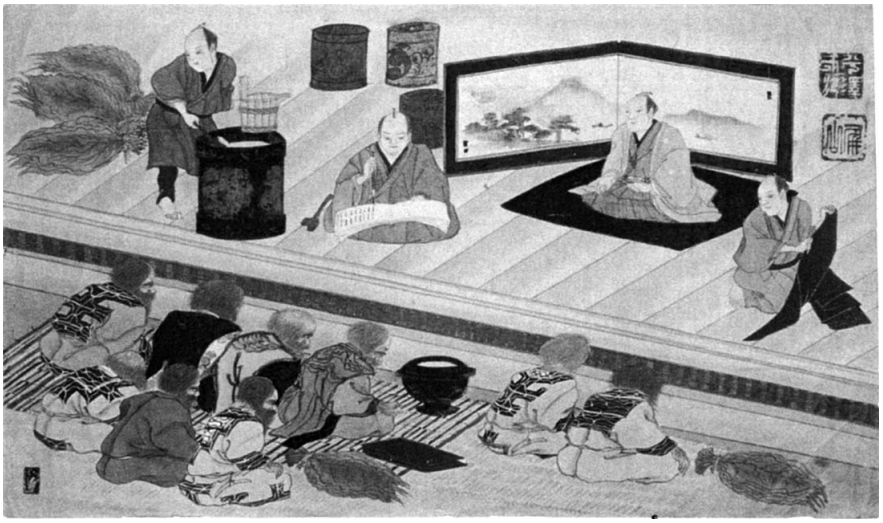

図4　「オムシャ図」（オムスク造形美術館所蔵）
財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編『アイヌの美――カムイと創造する世界――』2009．p. 139

ではなかったと考えられる．屏山は杉浦嘉七に経済的にも大変世話になっていたので，杉浦の依頼であれば断る訳には行かなかったであろう．嘉七は安政2年（1855）に箱館近在開発手配方，同3年（1856）に金銀山取扱御用取扱方となり，4年（1856）に屋敷内に産物仮会所を設け，苗字御免となり，奉行所の御用達に任命された[17]．嘉七にとってアイヌ種痘図の中に村垣淡路守を描いてアイヌへの強制種痘を実現した人徳を称え，その英断を頌徳することは自身の事業の拡大強化にも有益であり，奉行所との繋がりを一層強固にする絶好の機会であったと思われる．嘉七はこのような意を屏山に伝えたので，屏山は「蝦夷種痘図」の中で村垣と思しき上座の真ん中の人物だけは正面を向かせ，左右の2人は立斎らの接種を視るように顔を右方に向かせたのであろう．和人の中で正面を向いているのはこの人物だけである．ここに杉浦の奉行村垣顕彰の意図を確かに汲み取ることが出来る．

つまりアイヌ種痘図は桑田立斎らのアイヌへの種痘実施を顕彰するために描かれたのではなく，あくまでもこの事業を発案して実行に移した箱館奉行村垣淡路守を頌徳するために描かれたものであった．

おわりに

桑田立斎らによる安政4年（1857）のアイヌへの種痘は，平沢屏山のアイヌ種痘図によって広く世に知られているが，立斎が箱館滞在中，この図に見られるような奉行の村垣が臨席しての多人数のアイヌに対する種痘は行われなかったと考えられる．立斎側の記録にも屏山が同道して種痘風景を描写した記録はない．屏山が実際の接種の光景を目撃した可能性は残されているが，見たとしてもそれは種痘医1人による接種であったと思われる．屏山は世話になっていた箱館の豪商杉浦嘉七の意を受けてこの絵を描いたが，嘉七の目的は村垣淡路守の業を頌徳するためであった．この図は安政4年（1857）10月に奉行の村垣淡路守に献上され，村垣は箱館医学所頭取の塩田順庵に讃を依頼した．これが現在流布している各種のアイヌ種痘図の基になった原図であるが，新出のアイヌ種痘図は原図の下絵を基に描かれたと思われる．この原図の下絵は未だ知られていない．

本稿を草するに際して市立函館博物館の霜村紀子氏，北海道開拓記念館の三浦泰之氏に種々ご教示を戴いた．ここに記して感謝の意を表する．

注と参考文献

1）村垣淡路守．村垣淡路守公務日記．東京帝国大学編纂．大日本古文書（幕末外国関係文書附録之四）．東京：東京帝国大学文学部史料編纂掛；1926．p. 334–422
2）文献1　p. 366
3）文献1　p. 426
4）佐々木利和．『蝦夷風俗十二カ月図』について――平澤屏山とその作品――．高倉新一郎監修．北海道の研究（第3巻　近世篇Ⅰ）．大阪：清文堂；1983．p. 365–398
5）佐々木利．平沢屏山とアイヌ絵．財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編　アイヌの四季と生活．帯広：アイヌの四季と生活展帯広実行委員会；1999．p. 16–25
6）五十嵐聡美．最後のアイヌ絵師―平沢屏山．財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編．アイヌの四季と生活――十勝アイヌと絵師平沢屏山――．帯広：アイヌの四季と生活展帯広実行委員会；1999．p. 26–32
7）新明英仁．平澤屏山論．北海道近代美術館紀要2007；（巻号なし）：17–57
8）二代歌川国貞の「公命蝦夷人種痘之図」（北海道開拓記念館蔵）
9）霜村紀子．平沢屏山とその時代．財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編．アイヌの美――カムイと創造する世界――．札幌：社団法人北海道アイヌ協会；2009．p. 160–162
10）文献9　p. 140
11）文献9　p. 161
12）阿部龍夫．桑田立斎とアイヌ種痘．阿部龍夫．館の医事と医人．函館：無風帯社；1951．p. 35–41
13）阿部龍夫．塩田順庵と種痘紀事．阿部龍夫．塩田順庵と海防彙議．函館：無風帯社；1951．p. 36–39
14）阿部龍夫．村垣淡路守とアイヌ種痘　阿部龍夫．函館郷土手帖．函館：無風帯社；1957．p. 117–129
15）蒲原　宏．桑田立斎とアイヌ種痘図について．越佐研究　1966；（24）：25–36
16）加藤四郎．桑田立斎と蝦夷種痘図（その1，その2）．けんさ　1990；19（3・4）：29–32, 20（1）：21–24
17）杉浦　茂．場所請負人福島屋　杉浦嘉七四代物語．横浜：私家版；2004．p. 25–46
18）文献1　p. 827

19）文献 13　p. 37–38
20）村垣淡路守．村垣淡路守公務日記．東京大学史料編纂所編纂．大日本古文書　幕末外国関係文書附録之五．東京：東京大学出版会；1986．p. 394–395
21）佐藤　保編．善那氏種痘発明百年紀年会報告．東京：佐藤　保；1897．p. 122–123
22）宗田　一．図説日本医療文化史．京都：思文閣出版；1989．p. 287
23）中野　操．わが国最初の強制種痘．医譚　1954；(6): 1209–1210
24）阿部龍夫．深瀬洋春とアイヌ種痘図．医譚　1955；(8): 1286–1287
25）蝦夷人種痘の図．北海道．新北海道史 . 第 2 巻（通説 1）．札幌：北海道；1970．口絵
26）富士川　游．疱瘡の話　附種痘の由来．風俗画報 92 号　附図　明治 28 年（1895）
27）文献 7　p. 23, p. 43
「関防印」は書画などの右肩に押す印のことで，その位置が初めであることを示し，また表装の際にそれよりも左へ切り込むことを防いだ．「款防印」とも称される．
屏山は安政期までは「□（ママ）雲海」の関防印を用いたが，それ以降，晩年には「背山臨水」の関防印を用いたことが，後年の作とされる根拠であるという．
28）富士川　游は「疱瘡の話　附種痘の由来」（文献 25）の中で，坪井信良の厚意で借覧した桑田立斎の手記からアイヌへの種痘実施の状況を伝える二三の条項を抄出して，その後に「此に挿む所の図は，すなはち右の状況を写せるものにして，蒙昧なる土人を説得し，膳，椀，反物，土偶，彩絵等彼の好む所のものを与へて，彼の歓心を買ひ，由て僅に種痘の目的を達し得たるの実状を想ひ見るべし，塩谷（田の誤植―松木）松園の記あり，」（ルビは省略―松木）と記し，塩田の讃とアイヌ種痘図を示している．ここで富士川はこの図が村垣家に伝えられた絵とは述べていないが，阿部龍夫は「塩田順庵と種痘紀事」（文献 13，p. 36–37）の中で「箱館の豪商杉浦嘉七は，その頒徳の意味を以て自分の世話をして居たアイヌ画の大家平沢屏山をして蝦夷種痘図を画かせて淡路守に上った．村垣家所蔵の原図は富士川游氏が『風俗画報』で紹介されて居る．その他図様の多少相違したものが数種あるが，何れも淡路守が侍臣と共に正座して，左右に接種を受けたアイヌに賞として与える物品を積み上げてある前で，数人の種痘医が多数のアイヌに種痘を行って居る図である．」と書いている．しかし阿部は富士川が示した図を村垣家に伝来した原図と断定した根拠を示していない．
しかし桑田家に伝えられた図が村垣家伝来の図（ここでは富士川の示した図，図 5）を正確に模写したのかについては些か疑問がある．これまでの研究者は指摘していないが，富士川の図の左上に右手を挙げているアイヌの子供（左右は空白）が描かれているが，

図 5　富士川　游が『風俗画報』に掲載した「種痘施接の図」

その上の部分のアイヌ10人は森田氏所蔵の「蝦夷種痘図」では省略されている．芹澤美術工芸館所蔵の「種痘施行図」でも同様に省略されている．富士川の示した図で讃の末尾の署名は「塩田泰拝誌」であるが，「蝦夷種痘図」では「塩田拝誌」である．また富士川の示した図の落款「平澤氏印」（白文方印）と「屏山」（朱文方印）は「ウイマム図絵馬」，「蝦夷風俗十二ヶ月屏風」（文献6，p. 29）に押されている落款とは異なっているように思われる．これは将来の研究課題であろう．本稿では屏山がアイヌ種痘図に描いたような光景を実際に見たか否かを問題にしているので，富士川の示した図が村垣家伝来の図であるか否かについてはこれ以上論及しない．

29）ゑぞうゑほうそうの図　高倉新一郎編．アイヌ絵集成〈図録巻〉．東京：番町書房；1973．第148図

30）文献1　p. 827
31）二宮陸雄．桑田立斎先生．東京：桑田立斎先生顕彰会；1998．p. 258
32）文献31　p. 261
33）文献1　p. 427–428
34）文献1　p. 447
35）文献1　p. 464
36）文献1　p. 574
37）文献1　p. 927–928
38）文献1　p. 589–648
39）文献31　p. 278–279
40）財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編．アイヌの美――カムイと創造する世界――．札幌：社団法人北海道アイヌ協会；2009．p. 139下段

A Consideration of the Picture “Vaccination of Ainos” Painted by Byozan Hirasawa, in the Possession of the Omsk Museum of Fine Arts

Akitomo MATSUKI, MD

Hirosaki University Graduate School of Medicine, Department of Anesthesiology

In 1857, Norimasa Muragaki (1813–1880), a magistrate of Hakodate, proposed to the Tokugawa shougunate the compulsory vaccination of the Ainos. The shougunate accepted this and dispatched Ryusai Kuwata (1811–1868) and his colleagues to the Ezo area. They practiced the compulsory vaccination of the Ainos, with huge difficulty, from 1857 to 1858.

A merchant Kashichi Sugiura of Hakodate presented to Muragaki a picture of the scene of Kuwata’s vaccination practice to praise his excellent decision on vaccination, made in October, 1857. This was painted by Byozan Hirasawa (1822–1876).

Another picture of vaccination, painted by Hirasawa, has been found in the possession of the Omsk Museum of Fine Arts. The detailed composition of this picture is somewhat different from those of known copies. This suggests us that there might have been several sketches of the scene of vaccination. However, Hirasawa is believed not to have witnessed the actual scene as depicted in the picture, because Kuwata and other physicians did not practice in front of Muragaki during Kuwata’s stay in Hakodate, as Muragaki did not describe anything about the vaccination practice in his formal diary.

Key words: Norimasa Muragaki, Ryusai Kuwata, Kashichi Sugiura, Byozan Hirasawa, Painting of Vaccination to Ainos